



森の中の高知駅



高知を愛する皆様へ (28年6月号)

平成28年6月1日

夏も近づく八十八夜…が過ぎて日射しが強くなってまいりました。午前の作業とはいえ帽子が欠かせません。今月の共同活動日をお知らせいたします。

6月19日(日) 午前9時～11時

高知駅前電停脇花壇(「みんなの庭」)には、マリーゴールド、ミリオンゴールド、ペンタス、サルビアなど夏～秋花計160株を購入して植え付けます。お持ち寄り何でも歓迎。サツキが咲き誇っている北口駐輪場周植栽の草引きも課題です。

午後3時～4時 帯屋町筋中央公園前でチラシ配りと葛岡さんのギターライブ。

7月の月例活動日は10日(日)、8月は共同作業がお休みで自由活動となります。

5月のトピックス

○5月22日(日)の共同作業にはボランティア10人が参加、ワイワイと盛況でした。南口電停脇「みんなの庭」で雑草取りを行い、有志ご提供のアジサイ、ガザリア、皇帝ダリアなどを植えました。初参加が御一人。先月に続いて高知大学生も来てくれました。(右の写真)

午後はいつも通り帯屋町でチラシ配りとギターライブ。何事もコツコツ継続が大事ですね。



○5月23日(月)地権者である高知県、高知市の関係部署を訪問して近況をご報告、今年度の植樹場所のご相談(陳情)も行いました。

前川種苗さんに来月の植え替え(夏花を植え付け)へのご協力を依頼、ご快諾いただきました。準備のため共同作業日の前日(18日)にパンジーを撤去して土起こしと施肥を行うことになりました。

ホームページが出来ました。

<http://mori-kochi-eki.jimdo.com/>

駅前緑化活動は篤志家のご厚志で維持されております。引き続き皆様のお力添え(花苗提供、勤労奉仕、ご寄付など)をお願い申し上げます。

♥森の中の高知駅♥ 幹事連絡先：〒780-0042 高知市洞ヶ島町1-11

中田昌志 携帯電話：090-8849-3651 E-mail：m.nakata@ak.wakwak.com

公文敏雄 携帯電話：090-7016-3743 E-mail：kumont2@yahoo.co.jp

取引銀行：四国銀行よさこい咲都支店「森の中の高知駅 代表中田昌志」名義 普通 0709695

本屋大賞2016

「羊と鋼の森」(宮下奈都)の風景



小説の舞台

この小説は、「森の匂いがした。秋の夜に近い時間の森。風が木々を揺らし、ざわざわと葉の鳴る音がする。夜になりかける時間の森の匂い」という暗示的な文章で始まる。

「(北海道の)山の中の辺鄙な集落で生まれ育った」僕、「このままなんとか高校を卒業して、なんとか就職口を見つけて、生きていければいい」くらいに考えていた十七才の主人公が、「突然、殴られたみたい」な、「あっと叫び声を上げたくなった」出来ごとに遭遇する。あの時、放課後の体育館で。

「忘れもしない高次の二学期」、先生のいっつけで体育館まで案内した来客が「調律師 板鳥宗一郎」だった。案内を果たし、立ち去ろうとする主人公の背中の方から、ピアノの音がした。「ひどく懐かしい何かを表わすもののような、正体はわからないけれども、何かとてもいいもの」が聞こえ、主人公はピアノの場所に戻った。「欲しかったのはこれだと一瞬にしてわかった」。「森の匂いがした。秋の、夜の。僕は自分の鞆を床に置き、ピアノの音がすこしずつ変わっていくのをそばで見ていた。たぶん二時間余り、時が経つのも忘れて」。

この時、「調律という森に出会ってしまった」主人公は、将来を板鳥に相談、高校を卒業して調律の専門学校に二年間学んだ後、達人板鳥が主任を務める田舎町の楽器店に就職した。

(題名に出てくる「羊」は、ピアノの中のハンマーのフェルトの素材であり、「鋼(はがね)」はワイヤーの材料だということを、私はこの本を読んで初めて知りました。)

小説の中味

この小説は、調律の世界に身を投じた主人公の修行物語である。社長、個性的な先輩調律師たち、ピアノを弾く人々(お客様)、聴く人々などが多彩なエピソードとともに登場し、交わされる会話、心の動きなどが、丁寧にそして生き生きと描写されて読者を森の世界に引き込んでいく。中でも、美しいふたごの高校生姉妹のピアノをめぐる物語が圧巻だ。

田舎出の朴訥な青年は、音楽の素養すらない。「焦ってはいけません。こつこつ、こつこつです」という板鳥の教えに従って、「こつこつ調律の練習を繰り返すほかは、こつこつピアノ曲集を聴いた」。

あるとき大失敗をやらかした。「初めて、怖いと思った。鬱蒼とした森へ足を踏み入れてしまった怖さ」だった。すっかり落ち込んでいる主人公に対して「もしよかったら」と板鳥がチューニングハンマーを差し出した。チューニングピンを締めたり緩めたりするハンマーだ。「なんとなく外村君(主人公)の顔を見ていたらね。きっとここから始まるんですよ。お祝いしてもいいでしょう」。森の入口に立った僕に、そこから歩いてくれば良いと言ってくれているのだ。

このあとも、主人公は新人思いの先輩たちに見守られつつ、こつこつと修練と経験を重ねて行く。無欲でありながら、「目指す場所はあるか遠いあの森だ」との大欲を抱いて。

寸評

「山」や「森」や「田舎」をいとおしむ空気が小説に満ち満ちている。「羊のことを考えながら思い出すのは、風の通る緑の原で羊たちがのんびりと草を食(は)んでいる風景だ。いい羊がいい音をつくる。それを豊かだと感じる」素朴な主人公。「こつこつと」、「丁寧に」、「あきらめないで」、「一所懸命に」働くけなげな若者。昭和の香りのする、懐かしく美しい小説であるが、お金と効率最優先の、ゆがんだ現代社会に対する著者の静かな抗議が聴こえてきたような気がする。